様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月２２日現在

機関番号：３７１１１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：２００９年度　～２０１１年度
課題番号：２１７２０２４８
研究課題名（和文）　進歩的教育学者におけるナショナリズムに関する研究

研究課題名（英文）　On the Nationalism of the Scholars of Progressive Education

研究代表者
福嶋　寛之（FUKUSHIMA　HIROYUKI）
福岡大学・人文学部・准教授
研究者番号：２０４４１７３５

研究成果の概要（和文）：本研究では、まず進歩的教育学者の代表格・宗像誠也をとりあげ、宗像のなかで戦争末期に浮上した情緒的なナショナショナリズムこそが戦後に継承され、それが政府と対決していくうえでの原動力となったことを明らかにした。次に、進歩的教育学者と最も対抗関係にあった高山岩男をとりあげて、実のところ対立する進歩派とは目指すべきシンボルが共有されており、それゆえに両者の対立は激しくならざるを得なかったことを明らかにした。この点は戦後日本の保革対立の構造を理解する手がかりとなるものである。

研究成果の概要（英文）：This research deals with two scholars. One is *Munakata Seiya*, a scholar of progressive education. I made it clear that he had the sentimental nationalism, which had come to him during the closing years of World War Ⅱ, in the post war period and the thought became his driving force to keep up opposition to the conservative government. The other is *Koyama Iwao*, the complete opposite of scholars of progressive education. They cannot help having sharply divided opinions all the more because they were in agreement on the ultimate aim. This contradiction affords the key to an understanding of the structure of antagonism between conservative forces and progressive forces in the post war period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
２０１１年度	700,000	210,000	910,000
総　計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：進歩的教育学者・ナショナリズム・戦争末期・宗像誠也・上原専禄・高山岩男・教育と政治・国民教育論

１．研究開始当初の背景

これまで戦後教育におけるナショナリズムについては、もっぱら政策サイド（政府・文部省）に即して進められてきた。しかし、

それとは対立関係にあった進歩的教育学者もナショナリズムとは無縁でなかったことが既に指摘されている以上、対立する双方を相補的に捉えなければ、全体の理解につながらない。本研究では、戦後教育におけるナショナリズムの位相という問題を、これまでの政府・文部省に着目していく研究手法とは反対に、進歩的教育学者に即して明らかにしていったものである。

２．研究の目的

本研究の目的は、戦後教育におけるナショナリズムの位相をあえて政策主体たる政府・文部省ではなく、それとは対抗関係にあった進歩的教育学者に即して明らかにすることにある。ここでの進歩的教育学者とは、戦後、政府・文部省と激しく対立したことで知られる日本教職員組合の理論的指導者の教育学者、宗像誠也・宮原誠一・勝田守一らに代表される存在である。その際、設定した論点および具体的な課題は以下の通りである。

第一に、昭和戦中期からの歴史的系譜を重視する。というのも、彼等のキャリアは一様に、昭和戦前・戦中期から開始されていた。そのため、戦後日本において最も体制に反発した彼等が戦時期日本において国策協力にコミットしたことは、これまでもしばしば指摘されてきたことである。しかしこの問題については、従来転向論の枠組みで処理されるばかりで、その内在的な契機について検討されることはほとんどなかった。しかし、宗像が戦時期に検挙の対象とされていた事実を念頭に置けば、安易な転向論では説明できないことはもはや明らかで、その時代ごとの位置づけが求められよう。そして、彼等の戦後言説が戦中期日本の否定を通じて展開される以上、戦前・戦中・戦後を一貫させた丁寧な言説分析を行う必要がある。その際、戦局の推移にともなう彼等のナショナリズムの内実の変容こそが最大の論点となる。

第二に、前述したように、現在の研究水準においては、政府のナショナリズムを批判し続けた戦後進歩派の側もまたナショナリズムとは無縁ではなかったことが明らかにされている。そうである以上、彼等のナショナリズムの存在そのものを強調し続けるだけでは、もはや意味は無い段階に入っている。問われるべきは、彼等進歩派のナショナリズムがどのような構図のもとでのどのような性格のものなのかを丁寧に測定することである。そのためには、敗戦をはさむ 1930 年代から保革対立期の 1960 年代までの広い時期を分析の舞台として設定する必要がある。こうした広い時期設定のなかで、彼等のナショナリズムがその内実においてどのような展開をとげていくのかを見ることが出来ると考えられるからである。

３．研究の方法

（１）敗戦前後の言論状況の網羅的な調査

先に述べたように、昭和戦前期から戦後にかけての一貫した言説分析を行うならば、その準備作業として、網羅的な史料収集とデータ・ベース化が必要である。本研究ではさしあたり、その調査対象を代表的な進歩的教育学者である宗像誠也・宮原誠一・勝田守一などに集中させて行った。その際、細心の注意を払ったのは収集対象とした時期であり、具体的には敗戦をはさむ前後数年の時期である。というのも、この時期については、これまでほとんど注意が払われてこなかったからである。

その理由は第一に、敗戦前後という社会の混乱という状況のなかで、史料の残存状況が良好でないことが挙げられる。よって、敗戦間際の戦争末期の言論状況については、当時の警察が把握していた文献情報にあたることで、かなり高確度の言論状況を把握することが出来た。そして、これをもとに可能な限りの史料収集を行った。そして、敗戦直前同様に混乱状況にあった敗戦直後の言論については、今度は占領軍の検閲雑誌（プランゲ文庫）にあたることで、これまたかなり高確度の言論状況を把握することが出来た。以上の情報をもとに、可能な限りの網羅的な史料収集につとめた。

しかし敗戦前後の言論状況について、これまで注意が払われてこなかった理由は、研究手法に関わるより本質的な問題があると考えられる。まず戦争責任論とも関わってくる以上、著作集などから省略されてきたという経緯が存在する。そして次に、後にも述べるように、敗戦を挟む時期それ自体を捉えようとする研究視点そのものがこれまで希薄だったことによる。例えば、戦争末期を戦中期一般に解消するばかりでその固有性を見ていく視点そのものが欠如していた。よって、敗戦をはさむ前後数年はいわばブラックボックスであり続けた。この問題は、本研究を遂行していくなかで明らかになった研究手法上の大きな問題点と言え、本研究では、こうした状況に対し、敗戦を挟む前後数年こそを戦前・戦中・戦後を考えていくうえでのエポックとみなす視座を提示した。

（２）同時代認識への着目と析出

上記のような言論状況についての網羅的な調査は、彼等が言論を展開させていくにあたって、どのような人脈や情報や学知のなかにいたのかを見ることを可能にする。しかし以下に述べるように、同時代人による同時代認識に着目していく研究方法がもつ意味はこれにとどまるものではない。

戦後、戦前体制を激しく否定した進歩的教育学者の言説を分析する前提として、特に戦中期の教育政策、つまりは政府側の動向を整理することが不可欠である。しかし戦中期の教育政策それ自体が複雑極まりになく、それ自体独立した研究課題として成り立つほどの問題である。そこで本研究がとった方法は、彼等進歩的教育学者の同時代認識というフィルターを通して、戦中期教育政策を整理するというものであった。というのも、戦後に華々しく活動を展開する進歩的教育学者のキャリア開始が戦中期であったことと関係して、彼等は戦中期政府の教育政策を実に的確に把握していたからであり、それがまた彼等の戦中から戦後にかけての主張に反映されていたからであった。結果、同時代人認識というフィルターを通すことで、かえって戦中期教育政策の構造的な理解が可能になった。そしてこれはまた、従来往々として乖離しがちであった思想史研究と政治史研究を架橋する研究手法の開発としての意味をもつ。

（３）「国民教育研究所」への着目―1960 年代分析の端緒として―

保革対立期の 1958 年、進歩的教育学者の結集母体として創設されたのが、日本教職員組合の研究機関＝「国民教育研究所」である。研究所の「国民教育」との名称が如実に示す通り、ナショナリズムの色彩が濃厚なものであった。とすれば、同研究所の分析によって、戦中期以来の進歩的教育学者のナショナリズムの帰着点が確認することが出来ると考えられる。

具体的な方法としては、研究所の人事構成や運営方法、そして研究活動・主張活動の網羅的な分析となる。例えば、そこではどのような学統や学問的背景をもつ者が、どのような視点で研究主題を設定していったのかが焦点となる。注目すべきは、同研究所には歴史学者など他分野の学者も参加している点で、とすれば、同研究所の分析を通じて、広く戦後教育学がいかなる人脈や知的・理論的移入のなかで構築されていったのかを明らかにすることにつながる。これはまたやがて後年の、家永三郎教科書裁判などの教育闘争という現実の政治的共同行動を理解するうえでの重要な手がかりになるともいえる。

４．研究成果

（１）進歩的教育学者・宗像誠也の思想分析
―1930年代～1950年代分析として―

まず、進歩的教育学者を最も代表する宗像誠也（東京大学、日本教職員組合講師団）をとりあげ、宗像に即した戦前・戦中・戦後を通貫させた思想史的分析を行った。この研究課題については、論文「エポックとしての戦争末期―進歩的教育学者宗像誠也における戦後の出発―」（上）（下）として発表した。

本研究のいわば背骨に相当する作業であるが、意図せずして、戦後の起源としての戦時期に注目する昨今の研究（総力戦体制論）に対する方法的批判を内包するものとなった。すなわち、本研究では、戦後の起源を戦中期一般に解消させる総力戦体制論に対し、敗戦直前の戦争末期とは戦中期一般に解消されない固有性をもつ段階であり、戦争末期こそがやがて訪れる戦後を直接規定するエポックであると提起した。この視座は、広く昭和戦中・戦後をどのように捉えるのかという新たな方法論を提示したものと意義づけられるものである。

こうした新たな枠組みから本研究で掲げた課題に即して述べると、宗像のナショナリズムの展開をみるとき、戦争末期という極限状況ゆえに浮上した情緒的なナショナリズムこそが戦後に継承されるものであったこと、それはまた戦後に消滅するどころか、政府・、文部省との教育闘争にあたっての原動力となっていったことが明らかとなった。そしてこれは、やがて1960年に至って「国民の教育」権として定式化されるものであり、それを体現するものが、次にみる「国民教育研究所」であった、と展望した。

（２）「国民教育研究所」の研究
―1960年代分析として―

ここでの課題は、保革対立期に進歩的教育学者が創設した「国民教育研究所」なる組織に着目して、戦中期以来の彼等におけるナショナリズムの帰着点を見ることにある。その際、焦点となるのは戦中期の政府が掲げた「国民教育」なるタームを、戦後、反体制側に位置するはずの彼等進歩派があえて看板として掲げたことの意味である。この問題は、戦中期の要素を勘案しなければならない点で、前掲研究成果（１）で述べた課題と接続するものである。

ただ、本テーマについて本格的研究は申請者が初めて試みるものであるため、分析に入るだけの研究環境を構築することから始めなければならなかった。よって、まずは関係資料の収集から始め、適宜データベース化を進める方法をとった。幸い、作業途中で古書店より、「国民教育研究所」が刊行した資料群をまとまった形で購入することが出来、書誌学的な分析を網羅的に行うことが出来た。具体的には、目次集を作成することで本格的な分析の環境を構築した。刊行されたものについてのデータ整理はほぼ完了したと見られる。

対象とした資料群を列挙していけば、『国民教育研究所年報』、『季刊国民教育』、『国民教育研究』、『国民教育研究資料』、『国民教育研究所論稿』などである。

そして、これらの分析の段階に入ろうとしたとき、先述の「国民教育研究所」の原史料の所在を確認することが出来た（日本教育会館図書館）。これらは大量の未公開の原史料であるため、予定していた内容分析への着手という作業工程を変更して、史料の残存状況などの確認を進めることとした。原史料に接したのは本研究が初めてであるため、その情報整理・紹介と詳細な分析は今後の課題としてすみやかに遂行したい。

（３）「保守」の知識人・高山岩男の分析

本研究のさらなる展開の端緒とすべく、進歩的教育学者と最も対抗関係にあり、「保守」と分類された哲学者・高山岩男の思想的軌跡を行った。その意図するところは、戦後教育とナショナリズムという問題の歴史的構造に迫ることにあった。これについては論文「敗戦前後の高山岩男―「近代の超克」論の再措定―」として発表した。

ここでも前掲研究成果（１）と同様に、エポックとしての戦争末期という観点から、高山岩男の思想的軌跡を追究していった。その結果、明らかになったのは、高山もまた戦争末期の経験から戦後思想を構築していったことで、興味深いことに、そこから高山もまた対極に位置するはずの進歩派同様に、戦時日本社会の否定を通じた戦後、という共通したイメージを紡いでいた点である。つまり、対立する双方において目指すべきシンボルは共有されており、そうであるがゆえに両者の対立は激しくならざるを得なかった、ということが明らかとなった。

以上を敷衍すると、以下のような説明モデルが展望される。即ち、第一に戦後日本の「保守」と「革新」の対立構図は、意味内容は異なるにせよ違った記号で表現しない点、つまりは同じシンボルで自らの理念を表現しようとしていた点にその特徴があるのではないか。第二に、そのような現象を理解するための方法として、やはり昭和戦前・戦中・戦後という広い時間軸の設定が必要ではないか。すなわち、進歩的教育学者・宗像誠也は昭和戦前期には陸軍につながる「革新派」の一人であり、他方、高山岩男も海軍省のブレーンであったことは知られている。そしてそれぞれの人脈は戦後も引き続き一定程度維持されている。よって、両者の対立は、より広く 1930 年代～1960 年代という思想史的構図として理解できるのではないかということである。この点は、戦後日本の保革対立の構造を理解するうえで重要な手がかりになるものと意義づけられるものである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①福嶋寛之「敗戦前後の高山岩男―「近代の超克」論の再措定―」、『福岡大学人文論叢』、査読無し、第 43 巻第１号、2011 年 12 月、645～695 頁

②福嶋寛之「エポックとしての戦争末期―進歩的教育学者宗像誠也における戦後の出発―（下）」、『福岡大学人文論叢』、査読無し、第42巻第２号、2010年９月、661～711頁

③福嶋寛之「エポックとしての戦争末期―進歩的教育学者宗像誠也における戦後の出発―（上）」、『福岡大学人文論叢』、査読無し、第42巻第１号、2010年６月、315～362頁

〔学会発表〕（計１件）

①福嶋寛之「エポックとしての戦争末期―進歩的教育学者・宗像誠也における戦後の出発―」、九州歴史科学研究会例会、2009 年 12 月 26 日、西南学院大学

６．研究組織

(1)研究代表者

福嶋　寛之（FUKUSHIMA　HIROYUKI）

福岡大学・人文学部・准教授

研究者番号：２０４４１７３５

(2)研究分担者

なし。

(3)連携研究者

なし。